生誕１３０年

孤高の画家

Arima Satoe

有馬さとえ展

期間：令和5年12月5日(火)～令和6年3月3日(日)
会場：黎明館常設展示3階　企画展示室

有馬さとえ(1893 ～ 1978)は、鹿児島市に生まれ、明治44(1911)年に画家を志し上京すると、洋画家岡田三郎助に師事しました。
大正3(1914)年文展に初入選し、同15(1926)年帝展で洋画女性初の特選を受賞、その後日展の審査員、評議員を務めました。
画業一筋を貫いた有馬さとえの作品と、自身の言葉が添えられたスケッチ等を交えて紹介し、その生き様に迫ります。

洋画

『 厳冬に暖日ありて 』
昭和44(1969)年
光風会展、F40

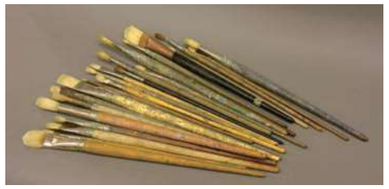
画面上方に冬の厳しい景色、手前には
暖色系の色の花を力強く描いています。

『 幼女 』
昭和13(1938)年
春台展、F30

明るく柔らかい、軽やかな筆致で幼い女性を描いています。

『 ひととき 』
昭和22(1947)年
第3回日展、F50

カジュアルな服装で楽器を手にした
女性を柔らかく明るいタッチで表現しています。



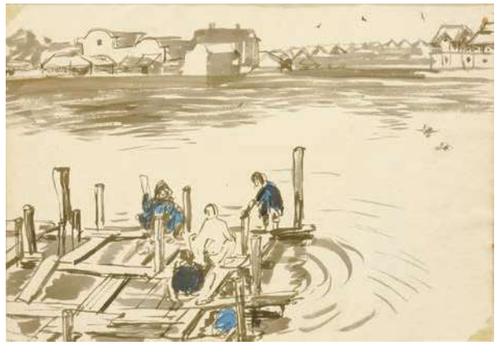
筆は、丁寧に手入れされており、今でもすぐに使えそうです。

パステルのすり減り具合で好みの色がわかります。

スケッチ

『 秋近し 』
墨画、紙

単色で描かれているのに、
空気感や季節感を感じられます。



『 中支蕪湖にて 』
墨画、着色、紙

柔らかい筆致で軽やかでリズム感のあるスケッチです。

『 いちご 』
水彩、紙

もらったいちごを描いてから
食べようとしたのでしょう。
みずみずしく描かれています。

「こゝろに　あをい　大波がくづれかゝる。
ちいさな花びらが　たった一つ
ゆれてただよう。」

「もらったいちご　5月26日　風さわやか
なんにもかけず
苺をそのまま　たべましょう。」

『 上海キャセイホテルから 』
墨画、紙

都会的、西洋的な町並みが描かれ、
澄み切った空気を感じられます。

『日高文子氏の像 』
鉛筆画、紙

描いたときのエピソードを添える
ユーモアのある作品。
余程印象的であったのでしょう。

「おもひ出の為に保存す。」

「（若い若い頃の私のかいたもの）
写生するからジッとしてゐてと頼んだら
わざとこんな妙な顔された。
日高文子氏はそんな風の方であった」

学芸講座（展示解説講座）

「孤高の画家　有馬さとえ」

日　　時：令和6年1月13日(土) 13：30 ～ 15：00
会　　場：黎明館3階講座室
講　　師：学芸課長　切原勇人
申込方法：電子申請、郵便往復はがき（申込期間内の消印有効）
申込期間：12月6日(水)～12月20日(水)

※事前申込制。詳細はホームページをご覧ください。

展示解説

日時：令和5年12月16日(土)
　　令和6年　1月21日(日)
　　2月18日(日)
　　いずれも13：30 ～ 14：10
会場：黎明館3階企画展示室

※事前申込不要、要入館料